

小建中湯

小建中湯 治三裏急。腹皮拘急。及急痛者。

① 小建中湯証は桂枝加芍藥湯証の更に一段と虚し、急迫症状の強いものに用いる

桂枝加芍藥湯や小建中湯の腹証には腹直筋が腹表に浅く拘攣しているものが多いけれども、これにこだわる必要はない。腹直筋の拘攣がなくて、ガスのために膨満しているもの、或いはガスのために膨満した腸管を腹壁から触れるものもあって、大建中湯の腹証に似ていることがある。また腹直筋が脇下で強く拘攣している時は、小柴胡湯の腹証に似ていることもある。桂枝加芍藥湯は虫垂炎に用いられることがあるが、小建中湯は慢性腹膜炎にしばしば用いられる。乳児の腹痛殊に夜泣きのくせのあるものには小建中湯の証が多い。小建中湯は下痢している人、嘔吐のある人には用いない。慢性腹膜炎で便秘している時でも、小建中湯を与えると、別に下剤を用いなくとも自然便が出るようになる。

○『傷寒二三日。』心中悸而煩者。

津液不足

心悸高進のある時は、表証があっても発汗剤を用いず小建中湯を与える

感冒のような軽い病気にかかっても初めからしきりに動悸を訴え胸苦しいというものがある。このような患者には悪寒、発熱、頭痛等の表証があっても麻黄湯のような発汗剤をやつてはいけない。またアスピリン、ダイアジンのようなものを与えても必ず食欲不振・悪心・胸内苦悶を起こして苦しむようになる。元来この種の患者は平素から虚弱な体質の人で、漢方という脾胃の虚している型の人である。このような時にはまず小建中湯を与えて動悸を鎮める必要がある。軽い場合は動悸がおさまるとともに熱も下るものが多い。もし動悸が止んで後になお表証があれば、桂枝一麻黄一湯、桂麻各半湯のようなものを用いる。もし誤って発汗せしめたために動悸も止まず熱も下らないものには、桂枝人参湯・茯苓四逆湯等を証に従って用いる。

〔注〕 表証とはからだの表面に現われる症候で、悪寒・発熱・頭痛・身体痛等をいい、嘔吐・口渴・下痢等の裏証に対する言葉である。原則として表証は汗解すべきものである。

臍傍の動悸の高進がいちじるしい時は、便秘していても下剤を用いてはならない

このような時はまず動悸を鎮める手当をする。動悸が鎮まってもなお便秘している時に改めて下剤を用いる。動悸を鎮めるには、他の症状を参酌して小建中湯、炙甘草湯等、動悸の章に出ている処方を用いる。

○『虚勞。』裏急。悸衄。腹中痛。夢失精。四肢痠痛。手足煩熱。咽乾口燥。

小建中湯

『金匱要略』のいわゆる虚勞裏急というを目標として、結膜乾燥症、鞏膜炎、眼底出血等に用う。また黄耆を加えて黄耆建中湯として用う。また眼目赤腫せずして、ただ痛神宗の如きものに効あり。

結膜乾燥症

この症は結膜の表面が乾燥して、涙液がこれを湿潤することのないものをいう。即ち患部の結膜が乾燥して白色を呈し、かつ一種の光沢を放ち、その状はあたかも脂肪か石鹼でも附着しているようで、涙液はその表面を流れても湿潤しない。

重症では角膜もまた乾燥して光沢がなく、その組織もまた透明を失うようになる。これを角膜乾燥症という。本病は栄養不良によって起こるものが、最も緊要である。

軽症では主として角膜の外側に当たって、眼球結膜に乾燥した小斑点或いは三角形の斑点ができ、これを注意して見ると、結膜上皮の状はあたかも泡沫の乾燥したものが附着しているようである。その患者は他に異常がないか、或いは同時に夜盲症を告げる。重症なものは、多くは七、八歳以下の小児で、眼球結膜が広く乾燥し、かつ一面に少しギラギラとしてあたかも銀屑か雲母を敷いたようである。また角膜の知覚は鈍麻し、同時に乾燥症を呈して、薄く灰白色に濁濁し、終いにある一部に浸潤を来し、化膿するに至る。その甚だしい場合は、いわゆる角膜軟化症となって、角膜全部が崩壊して、急に失明するようになる。

療法

小建中湯にて治す場合が多い。その他鶏肝丸、大黃廩虫丸、伯州散、理中湯の類を選用する。その目標とするところは、『眼科方函』を参照せよ。

虚弱見

五歳の男子。身体は丈夫ならず、色白く、肥り、風邪を引くと熱が出やすく、咳も喘咳ではないが、ポツポツと出る。盗汗もあり、夜尿もする。親はこの子供の身体を丈夫にし、風邪を引かぬようにしてくれといってきた。

診ると食欲、大便は普通。聴診上ラ音及び気管支カタルの徴候はない。腹直筋の拘攣や脇胸苦満もなし。

右に對し始め人参湯を用いた。それは水毒を去る目的であったが、二、三週間服用するも効なし。よって次に黄耆建中湯を与え、これにて全快す。他にも同様の例一、二があり、黄耆建中湯を用いて奏効す。右の場合、色白く、水ぶとりであることは黄耆を用いる場合の目標であり、男も女も皮膚のきめ細かく、軟らかなるものに用いてよし。余談なれど、夜尿症に黄耆建中湯または小建中湯を用い、どうしても効かないものには真武湯を用い、奏効した例が最近あった。

瘰癧

羽○田○蔵 男 十五歳

小学校の六年生の時肺門淋巴腺にかかったことがある。約十カ月前に頸部の淋巴腺が腫脹していることに気付いた。その後数個の淋巴腺が相次いで腫脹し、中には瘰癧を作つて排膿するものも二、三あった。

主訴及び目標―左右の頸部に数個の淋巴腺の腫脹があり、大きいものは鶏卵大である。そのうち左のものは瘰癧を作つて排膿している。疲労が甚だしく咳も少し出る。右背に水泡音を聴取する。食欲、大便には変化はない。

処方―黄耆建中湯、瘰癧のある部には紫雲を貼用する。

経過―一週間の服用で疲労が著しく軽くなり、その後前方を服用すること七週間にして、瘰癧瘰癧え、栄養血

色ともによくになったが、全治に至らずして、家庭の都合で休薬することになった。

案―『金匱要略』の「虚劳篇」に、馬刀俠瘰なる疾病が挙げられている。この病気は今の瘰癧で、これは劳から起る病だと説かれている。そこで「虚劳、諸の不足、黄耆建中湯之を主る」の条文を参酌して、胸部に浸潤があったにもかかわらず、黄耆建中湯を用いることにした。私は瘰癧にこの処方を好んで使用するが、好結果を得ることが多い。

夜尿症には小建中湯と八味丸の証が多い

筋肉の発育の悪い虚弱な児童の夜尿症には小建中湯の証が多く、食欲旺盛で血色もよく筋肉の発育もよくて夜尿症を訴えるものには八味丸が効く。幼児で附子を用い難い時は六味丸として用いる。八味丸も六味丸も煎剤として用いてもよい。

虚弱児童には小建中湯、小柴胡湯など証に従って長期間服用させると体質の改善になる

風邪を引き易い子供、食欲のない子供、血色のすぐれない子供、体重の増加しない子供などに用いる。

大便が十日も十五日も通ぜず、それでいて腹満、心下痞硬等の訴えもなく飲食も平素と変わらないものは虚証である

実証の便秘は二、三日も通じがなければ苦情を訴えるが、十日以上も便通なく、しかも平気で働けるものは虚証である。これには小建中湯を用いる。

便秘を目標に大黃、巴豆、甘遂、大戟、桃花等を与えて大便秘通せず、腹痛甚だしくかえって腹満を増すものは虚証である

また下剤を与えて、便通があっても、かえって腹が張るといふものも虚寒の証である。ともに温補剤を用いる。

また下剤を用いて下したところ下剤の効果がなくなつてからもいつまでも下痢しているものなど、みな虚寒の証である。附子理中湯、四逆湯、桂枝加芍薬湯、大建中湯、小建中湯などを用いて温補してやれば、便秘している時は自然便となり下痢している時は下痢が止む。

吃り

勝○信○、八歳、男。

吃りで困るといって連れて来た。瘦せた色の蒼い子供でたいへん神経質らしい顔付きで、食べものに好き嫌いがあって困るといふ。首から背中にかけて非常にこり、腹を診ると腹直筋が筋張っている。大便は一日一回、小便是普通である。これに小建中湯を与えた。初め三日分を与え、その後十日分ずつ三回、都合三十三日間飲ませが、近頃は顔色もよくなり、肥つて背や腹の筋張りも緩みほとんど吃らなくなった。ただし、この患者に小建中湯を用いたのは、吃るのも一種の急迫症状であるから用いたのである。

三黄瀉心湯の効かない出血に桃核承気湯の証がある

衄血に麻黄湯の証があることを『傷寒論』では述べているが、これは熱病の初期に見られるもので、頭痛、発熱、悪寒があり脈が浮緊で汗の出ない時に、衄血が出れば三黄湯を用いる。これで汗が出れば衄血は止み頭痛も軽くなる。一般に動脈硬化症などのある人にくる衄血には三黄瀉心湯の証が多いが、時に桃核承気湯の証がある。腹診によって少腹急結の状があればこれを用いる。三黄瀉心湯の腹証は心下部が張り気味で底力のあるものである。衄血でも紫斑病、白血病などからくるものは難治のものが多し。小児の紫斑病で衄血の止まないものに小建中湯を用いて早速に止血した例がある。これは『金匱要略』に「虚劳、裏急、悸、衄云々小建中湯之主る。」とあるのに暗示を得て用いたのである。

頭痛

患者は十二歳の男児、生来身体虚弱で、始終病氣をするが、一番困るのはしばしば頭が痛いといって、寝てしまうことである。平常食欲もあまりない。

診察すると、体格はやや小さい方で、やや瘦せ形という程度だが、顔色もさえないし、見るからにあまり丈夫そうではない。理学的診断上、特に異常をみとめない。脈細、舌に特徴なく、腹を診ると、肉つきうすく、両側の腹直筋が拏急している。診察当日も朝から頭痛がするといっていた。この患者に腹証から考えて、小建中湯を大人の半量を投与したが、この日を最後に頭痛は全く起らなくなった。小建中湯は、桂枝湯の芍薬の量を増して、アメを加えたものであるが、桂枝湯の桂枝を増量した桂枝加桂湯も頭痛に用いる。

湯本求真先生に次のような治験がある。

私の妹は、二十歳の頃、頭痛を思い、あたかも錐にて刺すが如く、劇痛忍ぶべからずと。私はアンチピリン、ミグレン、臭刺等知る限りの洋薬を投じたがその効果はなかった。そこで本方を用い、一服で少しく、二服で大いに軽快し、二日を経ずして全快した経験がある。

慢性腹膜炎

小建中湯

八歳の少女。慢性腹膜炎だというので来院した。主訴は二カ月前より元気がなくなり、疲れやすく、時々軽い腹痛があり、大便が七日から十日間も出ない。流腸して出すようにしているが、なかなかうまく出ないという。小便はよく出る。食欲はやや減少しているが、味は平生と同じである。腹部は少しく膨満して抵抗があり、臍の周囲に圧痛がある。

小建中湯七日分を投与す。少しく元気が出た。大便は七日間に二回自然便があった。これは二カ月振りであるという。更に前方を七日分投与。顔色がよくなり、腹満も幾分軽快した。更に七日分の投与。大便が毎日一回規則正しく出るようになる。更に七日分投与。

その後来院しないが、その患者を紹介した人の話るところによれば、元気ではね廻っているという。

右の患者と前後して、十六歳の中学生で瘰癧のある患者を診察して、黄耆建中湯を与えているが、最近非常に肥満して血色もよく、登校しても疲労せず、数個の瘰癧のうち一つは自然に破潰して排膿し、一つは消散した。なお三つの大きい淋巴腺が頸の周囲に頑張っているが、僅か一カ月余にほとんど軽快して来たのは、面白と思う。

ヘルニア

ヘルニアに小建中湯

話は二十年以上も前のことである。私が湯本求真先生の門にいた頃、先生から頼まれて患者用の漢方診療の手引きともいふべき『漢方医学案内』と題するパンフレットを書いたことがある。この案内書は来院する患者に無料で見せしめていたように記憶しているが、定価は十銭となっていたと思う。このパンフレットは割合に評判がよくて版を重ねた。しかし初版には漢方で治る病氣の中にヘルニア(或いは脱腸となっていたかも知れない)があるが、再版の時は、これを削った。なぜ再版の時にヘルニアを削ったかという点、その当時五十歳あまりの男子の患者が、ヘルニアを治すために湯本先生の薬を飲んでた。処方は大柴胡湯、桂枝茯苓丸料大黃牡丹皮湯合方去硝黄となっていたと思う。この患者はずいぶん長い間根氣よくこの薬を飲んでたが、ヘルニアはとうとうよくならなかった。そこで湯本先生はヘルニアは漢方では治らないから、再版の時にはヘルニアを削ってくれといわれたので、その通り削ったのを覚えてる。

その後であったと思う。奥田謙蔵先生が何かの話のついでに、生後間もない乳児のヘルニアを小建中湯で簡単に治したことを話された。私はこれにヒントを得て、その後横濱市の小越商店で診察した六十歳あまりの男子のヘルニアに小建中湯を与えたところ、一週間の服薬で完全に治った。その後も四、五例の患者を小建中湯で治した。最近の例は一歳と六カ月の男子で、色白く肩間に蒼く毛細管の透いて見える患者で、右の鼠蹊ヘルニアで手術を要すといわれたが漢方で治らないうかというので、これにも小建中湯を与えたところ、十日間の服用で完全に治ってしまった。それと同時に機嫌がよくなり、元気もよくなった。ヘルニアにも自然に治癒するものがあるが、一週間や十日間で治ったのは小建中湯の効に帰すべきであろう。しかし小建中湯でよくならないヘルニアもある。

いま私が『漢方医学案内』を再版するとすれば、ヘルニアをまた加えてもよいように思う。

腹膜炎

患者は二十七歳の婦人であるが、昭和二十五年一月二十七日初診。昭和二十二年八月に帝王切開によって辛うじて分娩を終って、その子供は目下元気に育っている。昭和二十四年六月、右下腹部に疼痛を訴えたので、医師に診てもらったところ盲腸炎だといわれた。この疼痛はそんなに激しいものではなかったが、なかなかよくなるので、二、三の医師に診てもらった。ある医師は慢性腹膜炎だといった。からだはだんだん瘦せて来るし、歩行するにはからだを少し前かがみにしないと歩けなくなった。その後熱はないのに悪寒がするので、胸部のレントゲン写真を撮ってもらった。そこでは両方の肺の結核だといわれた。安静にして寝ていたが、いつまでも腹部の疼痛は去らない。そこで某氏の紹介で小生に診を乞うた。

初診時の症状

瘦せて顔色が土のようで光沢がない。脈が沈澱で、殊に右がひどい。悪寒熱はない。舌苔なく、口渇もない。食欲は普通にある。大便は一日一行で、小便は少し近いようである。月経は順調である。肩が少し凝る。腹直筋は左右共に拘攣している。右下腹部からへそ下にかけて圧痛があり、腹部は板のように硬い。肺結核だといふレントゲンの診断などを思い合すと、腹膜炎を考えるのは当然である。しかしどうもはっきりした診断がつかれる。患者は寄生虫がいるのかも知れない。蛔虫は何回も駆除したという。蛔虫のせいとも思えない。強いて診断をつけんとすれば、腹部のレントゲン検査も必要だろうし、再度の開腹手術も必要だろう。

診断・治療

漢方の診断はいかん。三陰三陽のいずれに当たるかといえば、この場合はまず太陰病を考えるのが当然である。脈沈澱、熱なく、口渇なく、便秘せず、頭痛せず等の点を考えると、太陽病も、陽明病も、少陽病も否定できる。そしてこの患者は厥陰病の上熱下冷の候もなく、少陰病の足冷え、下痢等もない。そこで太陰病として小建中湯を与える。『傷寒論』には、傷寒で陽脈沈、陰脈弦のものは一般の法則として腹中の急痛がある。これにはまず小建中湯を与えるという条文がある。小建中湯は桂枝加芍薬湯に膠飴を加えた処方で、太陰脾虚の証に用いる方剤である。

経過

十日分服薬して患者は母親に連れられて来院したが、腹痛は十中五、六は去ったという。元気で顔色が生々として来た。更に十日分前方を与える。これを飲み終って、患者は右足が少し痛むが、腹は痛くないという。腹筋の拘攣も緩み、腹は弾力が出て来て、全身の栄養はよくなった。この日更に十日分を与える。患者はそれきり来院しなくなった。それから幾月か経ったある日、その患者の母が新しい患者を連れて来院した。その時の話によると、あれから腹痛もなくなり元気も出て喜んでいたところ、間もなく痔が痛むというので外科の先生に診てもらった。すると肛門に金属性のものがひっかかっているというので、よく診たところ、それは缺であった。(筆者曰く、おそらく止血鉗子であったと思う)。出て来た缺は黒くさびていたという。この缺が出てから患者はすっかり病気を忘れてしまったという。思うに帝王切開の時に止血鉗子を腹中に置き忘れていたものが出て来たものと思う。それにしても小建中湯を飲んで腹痛が止んだというのも面白いが、どんな経路で鉗子が肛門まで下って来たかと思うと不思議でならない。レントゲンで鉗子の所在を確かめておいたならよかったのだと思う。この病気も、『傷寒論』の「医のために病んだ」方の類である。

頻尿

船○道○、十四歳、女。

背のヒョロ長い、顔の色は土色をした子供である。この子供はたいへん小便が近く、一時間に二回は出る。そして分量はたいへん多い。いくら食べても瘦せて肥らない。小便が出たくなると、ただちに便所へ駆け込まずに、その場でもらしてしまおうという。疲れやすく、根気が続かないといい、食べ物はたいへん刺激性のものを好み、ライスカレー、胡椒をよく食べるよし。大便は毎日一回、どちらかというと軟便で、冬は手足が冷える。口が渇き、水や茶をよく飲む。夜間も時々寝小便をする。これに小建中湯を与える。一週間飲んで来たら小便が二時間に一度位になり、もらすようなこともなくなった。引続き服薬中であるが、これは一カ月も経てば目方も増えるであろう。

34 桂枝湯 (けいしとう) 別名、陽旦湯 (ようたんとう) (傷寒論)

桂枝・芍薬・大棗・生姜 各四・〇 (乾生姜は一・五) 甘草二・〇

微火(とろひ)で煮る。服後うすくて熱い粥をすすり、ふとんをかけて発汗を助ける。流れるほどの発汗でなく、汗はむ程度の方がよい。本方は傷寒論における諸薬方発展の基本をなすものである。

〔応用〕平素からやや虚弱の体質で、表が虚している(皮膚の抵抗力が弱い)ものの外感に用いることが多い。その他一般虚証の体質者に起こる雑病に応用され、また加減方が多く、それぞれ多くの疾患に用いられる。

本方は主として感冒・神経痛・リウマチ・頭痛・寒冷による腹痛・神経衰弱・虚弱体質・陰瘻・遺精等に応用される。

〔目標〕太陽病の冒頭の薬方で、外感に用いる場合は、脈は浮弱で、悪寒・悪風・発熱・頭痛・自汗・身体疼痛というのが目標である。また気の上衝があり、乾嘔・心下悶のあることもある。自汗は服薬前に自然に汗のあるもので、虚弱体質のものに用いられることを示している。気血・榮衛が調和せず、表が虚して熱のあるもの、あるいは気の上衝するものを治すので、舌には変化がない。腹症は特記すべきことはないが、腹壁が薄く緊張することもある。

〔方解〕主薬はいうまでもなく方名のごとく桂枝であって、気をめぐらし、表を発散し、また上衝を鎮める作用がある。次に重要なのは芍薬で、血行を盛んにし、また筋肉の緊張を緩和し、桂枝の作用を調整する働きがある。また甘草は芍薬と協力して筋緊張や疼痛を和らげる。また甘草は桂枝と組んで気の上衝(のぼせ)を治し、生姜は桂枝とともに気を順らし、水を利用し、また桂枝・大棗・甘草等の甘味の剂が胃にもたれぬようにする。大棗にはまた胸中を潤し、胸中の煩悶を治す働きがある。

これらの諸薬がよく協調して、桂枝湯証という病態を、生理的平常の状態に引き戻すものである。

〔加減〕

(1) 桂枝加芍薬湯 (芍薬を加える)

この方はさらに腹筋が拘攣して腹痛があり、腹満感のあるものに用いる。

(2) 桂枝加芍薬大黄湯 (右にさらに大黄を加える)

前症で便秘するもの、また結腸炎で、左腹下部に索状と硬結を触れ、圧痛がある。

(3) 桂枝加葛根湯

桂枝湯の証で項背部の緊張する者に用いる。

(4) 桂枝加黄耆湯

桂枝湯の証で盗汗の出る者に用いる。また虚弱児の感冒・湿潤性の皮膚病・筋肉リウマチ・盗汗・多汗症・

黄疸等に用いて有効である。

(5) 桂枝加厚朴杏仁湯

桂枝湯の証で喘咳する者、また喘息の患者で桂枝湯の証のあるものによい。

(6) 桂枝加附子湯

桂枝湯の証で発汗過度、自汗漏出し、悪寒を覚え、尿快通せず、四肢の屈伸にこわばる感のある者を治す。

感冒で悪寒、発汗止まらぬもの・産後の脱汗・半身不随・小児麻痺・筋痙攣・神経痛・リウマチ・手足冷え等に応用される。

(7) 桂枝加朮附湯

さらに朮を加えたもので、脳出血後の半身不随・関節炎・関節リウマチ・神経痛等に用いる。

(8) 桂枝加竜骨牡蛎湯

性的過労・陰瘻・遺精等に用い、元気を回復させる。しばしば直腹筋が拘攣し、腹部の動悸が亢進する。神經衰弱・小児の夜尿症・チック病等にも応用できる。

○『男子。』黄。小便自利。

肝炎に小建中湯

『金匱要略』に「男子の黄、小便自利する者は当に虚勞の小建中湯を与ふべし」という条文がある。これは男子の黄疸で、小便が多量に出るものは、「虚勞篇」に出てくる小建中湯を与えるがよいという意味である。黄疸に用いる茵陳蒿湯や茵陳五苓散は、小便の不利を目標にするが、この小建中湯の場合は、小便の自利が目標になっている。ところで、黄疸のあるような場合で、小便自利する例はまれであるから、黄疸にこの方を用いた報告は少ない。

かつて矢数有道氏は雑誌『東亜医学』二十三号に、小建中湯で黄疸を治した例を報告した。

私がこんど報告するのは、慢性肝炎に小建中湯を用いた例で、この患者には黄疸はなかった。

患者は昭和三十五年生れの小柄な少女で、約一カ年前より肝炎の治療をうけているが、少しも快方にむかわないので、昭和四十一年六月に当院に治を求めた。

主訴は、食後や風呂の後で腹が痛むというもので、汽車や電車にも酔うという。大便は三日に一行で、尿のウロビリノーゲンの反応は強陽性で、肝を少し触れる。

この日、小柴胡湯合茵陳蒿湯去大黄を与える。これをつづけること六カ月、少しも軽快しない。

この患者は、汽車で三時間あまりかかる地方に住んでいるので、一カ月に一回の来院であるが、汽車に乗ると腹痛を訴えて吐くという。

そこで柴胡桂枝湯に転方したが、依然として、汽車に乗ると腹が痛み、その時に、しきりに欠伸をするという。この時、はじめて、尿が近いということを訴えた。

そこで人参湯に転方したが腹痛が去らない。そこで柴芍六君子湯にしたところ、ウロビリノーゲンの反応が正常になってきた。しかし、腹痛は依然として去らず、尿が時々もれるという。

そこで、小建中湯にした。疲れやすいのと、腹痛があるのと、小便自利を目標にしたのである。ところで、これを飲みはじめて、はじめて腹痛がなくなり、汽車に乗っても何ともなくなり、ウロビリノーゲンの反応も正常で、肝もふれなくなり、元気が出てきた。

思うに、この患者は、はじめから小建中湯証であったものを、柴胡剤を用いたので、なかなかよくなるなかつたものと思う。

小建中湯の瞑眩

一婦所謂勞症なるものを患ひ殆んど危篤に至らんとす、診するに裏急は拘攣結実して腹底に沈着せるなり、故に小建中湯を与ふ、其夜瞑眩吐下傾くるが如し、余曰く、是薬力の徹せるなりとて、益々之を攻め数十剤を服して愈。(同)

漢方治療が効果した難治性てんかんを有する重症心身障害児の一例

生薬：
成分：
処方：小柴胡湯、小建中湯、人参湯、附子末

雑誌名：現代東洋医学 12巻 1991年 1号 326頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：その他
剤形： 投与経路：ヒト経口 投与量：

併用薬：抗てんかん薬

内容：難治性てんかんを有する重心児に従来の抗てんかん薬を減量しつつ漢方薬を併用して主訴の痙攣、ろいそう、便秘が改善され、更に精神運動発作が促進された症例。(4歳、男)；難病、難症の漢方治療第4集(臨時増刊号)参照

小児の自律神経疾患の漢方治療-②反復性臍疝痛、周期性嘔吐症

生薬：
成分：
処方：桂枝加芍薬湯・小建中湯・補中益気湯

雑誌名：現代東洋医学 12巻 1991年 4号 47頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：脳・神経系
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：

併用薬：

内容：反復性臍疝痛の第1選択剤は小建中湯、桂枝加芍薬湯である。また、周期性嘔吐症に最も適切な方剤は小建中湯、補中益気湯である。

虚弱児(易感染児)の漢方治療-小建中湯

生薬：
成分：
処方：小建中湯

雑誌名：現代東洋医学 12巻 1991年 3号 29頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：臨床一般
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：

併用薬：

内容：胃腸型(消化器型)虚弱児(易感染児)の第一選択薬として小建中湯が用いられる。

小児の自律神経疾患の漢方治療-③夜尿症(頻尿傾向を有するもの)

生薬：
成分：
処方：小建中湯、柴胡桂枝湯

雑誌名：現代東洋医学 12巻 1991年 4号 47頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：脳・神経系
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：

併用薬：

内容：頻尿傾向を有する小児には小建中湯か柴胡桂枝湯を第1選択剤とすることが良いとされる。

小児、循環器疾患の漢方治療-②小建中湯

生薬：
成分：
処方：小建中湯

雑誌名：現代東洋医学 12巻 1991年 4号 27頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：脳・神経系
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：10.00mg/day

併用薬：

内容：小建中湯はその成分により半夏白朮天麻湯に比べて起立性調節障害の症状の強い例に有効と考えられる。

めまいに小建中湯

症例：27歳男性

主訴：眩暈

家族歴：父肝癌死（49歳）

既往歴：特になし

現病歴：平成4年12月多忙であったところ電車の中で立ってられないほどのめまいがおこった。

身体が揺れ、動悸がした。近医を受診し自律神経失調症の診断でリスミー、メイラックス、加味帰脾湯エキスを処方されている。平成6年8月30日初診。

現症：身長170cm、体重54kg、血圧112-64mmHg、顔色普通、眼球結膜やや充血あり、舌は湿って淡色、薄い地図上の白苔がある。脈は沈細、腹証は服力中程度で両側の腹直近の攣急を認めた。

経過：初診時はツムラ小建中湯エキス9.0g分3を処方。

2週後、めまいが軽減してきた。鼻閉がとれない。

6週後、少し頭痛がする。眼が疲れやすい。便通良い。めまいはふらつき程度となった。鼻閉は時にでる程度。

11週後、元気になってきた。湿疹が顔や胸にでる。

15週後、めまいはない。鼻閉がある。

19週後、めまいに対する不安がある。診療内科から治療が必要なくなったと言われた。

29週後、インフルエンザとなり漢方薬が飲めない時期があったところめまいがでた。

37週後、歩行時にたまにバランスを崩すがめまいはない。

桂枝湯 (けいしとう)

本方は 傷寒論の最初に出てくる薬方で、血行をさかんにし、身体を温め、諸臓器の機能をたかめる作用があり、感冒のような熱のある病気に用いるときには、悪寒または悪風、発熱、頭痛があって、脈浮弱であるものを目標とする。この場合、汗が自然に、にじみ出るような状態のものもあるが、汗の出ているものにも用いてよい。熱のない一般雑病に用いるときには、悪風や悪寒はないが、脈は弱である。

本方の主薬である桂枝は、生姜とともに興奮の効があり、血行をさかんにし、からだを温め、諸臓器の機能をたかめる。芍薬には鎮静の効があって、桂枝の作用を調整し、甘草と組んで、異常緊張を緩和し、疼痛を治する効がある。大棗は甘草とともに、急迫を治し、強壯の効があり、また生姜とともに、矯味薬でもある。

本方は 感冒、神経痛、頭痛、寒冷による腹痛、虚弱体質、妊娠悪疽などに用いられる。

桂枝加芍薬湯 (けいしかしゃくやくとう)

本方は 桂枝湯中の芍薬の量を増量したもので、桂枝湯が太陽病の治剤であるに反し、本方は 太陰病の治剤である。

本方は 冷え症で、腹痛があって、腹痛するものを目標とし、腹筋は緊張している。下痢していることもある。

本方は 大腸炎、慢性腹膜炎、直腸炎などに用いる機会がある。

本方に大黄を加えた薬方に 桂枝加芍薬大黄湯があり、本方を用いるような場合で便秘の傾向のあるものに用いる。

桂枝加葛根湯 (けいしかかこんとう)

本方は 桂枝湯証で、項部から背にかけて緊張するものを目標とする。葛根には、筋の緊張を緩解する効がある。

桂枝加黄耆湯 (けいしかおうぎとう)

本方は、桂枝湯に黄耆を加えた方で、皮膚に水気を含んで、弾力に乏しく、盗汗、しびれ感 などのあるものに用いる。

黄耆には皮膚のしまりをよくして、水気を去り、膿を排し、肉芽の発生をよくし、強壯の効がある。そこで 虚弱児の感冒、皮膚病、盗汗、中耳炎、顔面神経麻痺などに用いる。

桂枝加附子湯 (けいしかぶしとう)

本方は 桂枝湯に附子を加えた方で、太陽病で、少陰の証を兼ねたものに用いる。本方は 元来 桂枝湯証を誤まって発汗し、汗がもれてやまず、そのため体液の損亡が大きく、患者は悪寒をおぼえ、尿は淋瀝して快通せず、四肢がかすかにひきつれる状態のものを目標に用いる方であるが、本方に 朮を加えて、桂枝加朮附湯とし、朮と茯苓を加えて 桂枝加苓朮附湯として、つぎのような病気に用いる。

神経痛、リウマチ、冷え症の腹痛、半身不随、小児麻痺。

桂枝加竜骨牡蠣湯 (けいしかりゅうこつぼれいとう)

本方は 桂枝湯に竜骨牡蠣を加えた方で、竜骨、牡蠣には鎮静、強壯の効があるので、虚弱な患者で、興奮しやすく、疲れやすいものに用いる。脈は大で力がなく、臍部では動悸が亢進していることが多い。

そこで 本方は 神経症、陰萎、早漏、夢精、チック病、遺尿症などに用いる機会がある。

桂枝去芍薬加蜀漆竜骨牡蠣救逆湯 (けいしきょしゃくやくかしょくしつりゅうこつぼれいきゅうぎゃくとう)

本方は 火熱を身体に加えたために起こった反応を治する効がある。そこで火傷、湯傷などの患者に内服せしめて、全身症状ばかりでなく、局所の疼痛を緩解して消炎の効を発揮し、灸の反応熱を治し、炬燵、入浴などの過度によって上逆、不快、頭痛、悪心などを起こしたものを治する。

12 桂枝湯 (けいしとう)

桂皮・芍薬・大棗各4、甘草2、生姜0.5 (g)

漢方の最重要古典『傷寒論』の冒頭に記されているもので、諸処方の基本となる処方とされている。

【症状治療】 ① 感冒などの急性熱性疾患に用いる際は、悪寒、悪風(悪寒の軽症で風が体にあたってはじめてさむけを感じずるもの)、発熱、頭痛、身体痛などがあり、脈が浮弱であるのを目標とする。また平素体力のないものや疲労して体力のない状態の消化器型感冒に使用する。自然発汗傾向の者は止汗的に作用する。脈状を診て汗のない状態でもマイルド作用して発汗解熱させることがある。

② 発汗療法や瀉下療法など強い治療をした後の残存症状の寛解や体力の回復。

【長期使用】 慢性疾患では体質的に虚弱な者の自律神経失調症に用いる。また応用として、強い作用の漢方薬(瀉剤など)を使う前の premedication として使う場合がある。

【注意】 桂枝の味がどうしてもグメという者がある。この場合はたいてい無効なので、桂枝湯を使わず香蘇散にする。また酒飲みには使わないことになっている。

桂枝アレルギーの者がままする。免疫がらみの疾患に使う時は注意する。

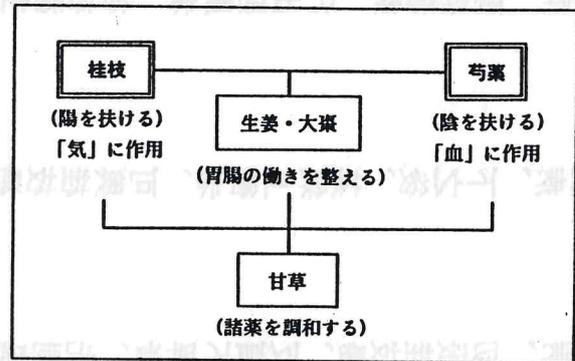


図61 桂枝湯の大意

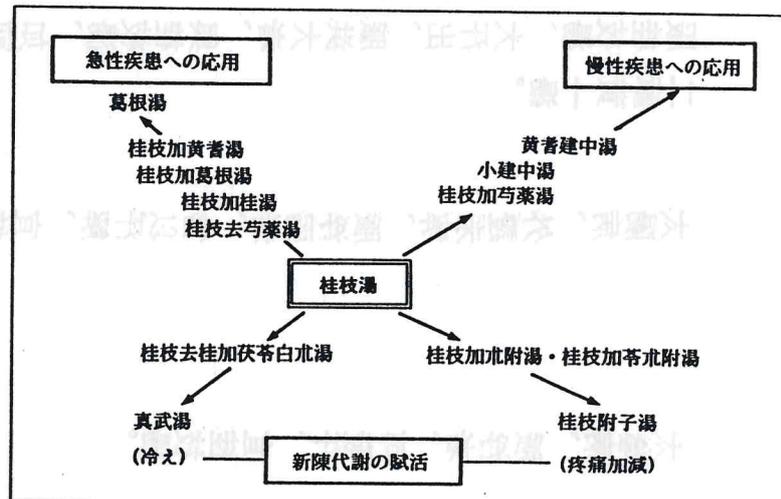


図62 桂枝湯の関連処方